

白のポロシャツにジーンズの父親が、抱えた幼児の足を苗木の根元に下ろす。「大きく育ちますよーに。はい、踏んで」。5月23日、奥秩父の山ひだに隠れた山梨市三富。首都圏からの家族連れや夫婦20人近くが、慣れないくわを振り、楽しみにヒノキの苗を植えていく。

植樹会を開いたのは、東京が拠点の投資顧問会社「サステイナブル・インベスター」（本社・沖縄県）。幅広い個人の出資で山林を買い取り、手入れを進める「森林ファンド」を3年前から運用している。参加者はこの山に投資した人々だ。

同社は1口10万円で全国の84人から7300万円余を集めた。その半分で三富に18畝、東京都檜原村に10畝の山林を購入。残りは格付けの高い外貨建て債券などに投資し、運用益を草刈りや間伐の費用に充てている。

三富では、地元森林組合に整備を依頼した。現場は20年

第8部 山と里を支える

④

森の世紀

57

ファンドがむすぶ

個人投資集め山林再生

前に所有者の相続に絡んで伐採されたままで、周りにも手入れ不足の暗い杉、ヒノキの林が目立つ。「こんな手のかかる山をよく買ってくれた」と、組合業務課長の岡部静次さん(54)。木を育てる目的の山林売買は久しくなかったという。

「金融の流れを、持続可能

(サステイナブル)な社会づくり」に振り向けた」と、代表取締役の滝沢信さん(36)は語る。大手生命保険会社で融資部門を担当していた12年前、バンクグラデシユで貧困層に無担保融資を続ける銀行家ムハマド・ユヌス氏(2006年ノーベル平和賞受賞)と出会い、思いは定まった。

仕組みが複雑になり「身の丈を超えた投資」が拡大する金融のあり方に疑問を持ち、06年、大手証券会社の元社員らと起業。生産性が低いだけの理由で市場から無視されてきた森林の価値に着目した。大学生、研究者、上場企業の役員、弁護士、中堅サラリーマン、会計士…。水や空気

をはくむ森づくりに個々の資金を生かそうと呼び掛け、多彩な顔ぶれが集まった。孫の名義で出資した人もいる。「一般の投資話では、こつはかない。時間はかかるが、金融や林業の専門家でないさまさまな人がかかわることで状況は変えられる」。滝沢さんは手応えを感じる。

米国発の金融危機が利益至上の世の中に反省を迫る中、「社会的責任投資(SRI)」と呼ばれる、社会や環境への貢献を重視した投資行動が徐々に支持を広げている。長野県内でも飯田市で、太陽光発電設備の普及を市民ファンドで後押しする試みが進む。

「投資といえはもつけ話といつイメージでした」。植樹会に長男(9)と訪れたさいたま市の建築士の男性(42)が言う。初めての投資だが、「収益はあまり気にしない。それより山が生き返る仕組みづくりにこつて参加できるのがいいですね」と、満足げに話した。



森づくりに出資し、ヒノキ苗を植える家族連れ。金融の新しい試みが始まっている＝山梨市三富